

「近代文学」誌上の日野啓三

— 一九五一年まで —

山内祥史

I 荒正人の講演

日野啓三「『近代文学』と私」（『『近代文学』復刻版 解説・細目・執筆者索引』日本近代文学館、一九八一年三月二〇日付発行）に、次のような言説がある。

荒正人という講師がどういう人かも全然知らないままに、学校の講堂にふらりと講演を聞きに行ったことが、私と「近代文学」との、そして文学そのものとの関係のはじまりだった。

昭和二十二年、十八歳の私は旧制一高文科の二年生だったが、はつきりした将来の目標はなかった。漠然とドイツ観念論哲学の難解な翻訳などを読んではいしたが、自分なりに敗戦、外地からの引き揚げなどの転変の中で感じ考え悩んできたことと、壮大な哲学体系とは結びつかなかった。

そういう時期に、荒正人の講演を聞いたのである。荒さんは例の早口で、野間宏の「暗い絵」「顔の中の赤い月」、椎名麟三「深夜の酒宴」などを例にあげながら、小さく醜い自分に固執し続けるこ

とが、新しいヒューマニズムへの道であると熟っぽく説いた。そういう逆説の発想に、私は目を洗われる思いがした。

「文学少年でなかった」日野啓三は、「荒正人という名前」も「近代文学」という「雑誌の存在」も全く知らなかった。「たまたま暇つぶしに」「偶然入ってみた」講堂で、その講演を聞いたのである。「まだ焼夷弾の突き抜けた穴がぼつかりと天井にあいて」いた。「忘れもしないが、昭和二十二年の秋」で、「『近代文学』が出てすでに一年くらい経ったあとだと思う」と回想している。当時の旧制高校は「急激な左翼的風潮の時代」で、日野啓三が在学していた第一高等学校などは、一時「全校生の三分の一が、党员か準党员に近かったことがあるくらい」だった。旧来の「ドイツ観念論的な風潮」に対し、戦後急に「唯物論的な考え方が強まって、カント、ヘーゲルかマルクス、レーニンかという二者択一が突きつけられ、「自分自身の問題」を、どういうふうに考え取り組んでいいのか、また、「自己探究というか自己表現というか」その方法に困っていた時であった。そういう時に、荒正人の講演を聞いたのである。

日野啓三「怒れる夢の人―回想・荒正人―」（『新潮』第七六卷第八号、一九七九年八月一日付発行）に次のような言説がある。

戦争中に修身の教師が黒板に大きく「個人主義」と白墨で書いて「これこそ最大の悪だ」と言いながら教室じゅうをにらみまわしたとき、私は自分のことを言われたように怯え震えたことがあった。その恐怖は敗戦後も引き続いて心の中に残っていた。

「あまりうまい講演ではなかったけれど」「いやに早口でしゃべる元気のいい講演者の言葉を講堂の隅でぼんやり聞いているうちに、私ははっとした」と日野啓三はいう。「それまで後めたく後暗くどうしようもないものとして、ひとり自分の心の中に押しかくしていた」エゴイズムとニヒリズムとを、荒正人は「新しいヒューマニズムの原基だ」と、熱っぽく説いたというのだ。戦争中から敗戦にかけて目のあたりにしてきた、「現実と人間」の「醜悪な面」と「虚無感」「無常感」、そうした「ネガティブな認識と実感に徹することによってこそ、新しいものが生まれる。ネガティブな自己認識なしの新生はありえない」と荒正人は説き、その「主張」に日野啓三は「打たれた」のであった。「その講演を聞いたときが私にとって、真の戦後の始まりだった」と、日野啓三はいう。

II 荒正人と「近代文学」とへの接近

講演のあと「小規模な座談の集まり」があつて、日野啓三は参加して「しきりに質問した」ようだ。集まりのあと、荒正人は名刺をくれて「よかったら家に遊びに来給え」と言ってくれた。荒正人三四歳、日野啓三

一八歳。こうして荒正人と近づきになるとともに、「文学好きの同期生」から「近代文学」のバックナンバーを全部「借りてきて「夜を徹して」読んだ。「怒れる夢の人―回想・荒正人―」（前掲）によれば、荒正人「第二の青春」（『近代文学』第一巻第二号、一九四六年二月二〇日付発行）の次のような言説が、「乾ききった地面が水を吸いこむように心の肌沁みこんだ」という。

人間はエゴイステイツクだ、人間は醜く、軽蔑すべきものだ、そして人間のいとなみの一切は虚無に収斂するものだ―このことを痛切にかんじようではないか。一切はその上でだ。

「論理よりもレトリック、思想よりも表現」が、日野啓三を妖しく捉えた。「こういう文章と表現があるのだ」と、彼の「心は震えた」という。また、「近代文学」を読んで、問題のたて方に「そのどちらからかではなしに、その両方をうちに包みながら、その両方をこえるような新しい立場、新しい次元がありうるのではないかと知って」驚いた。「自己探究」「自己表現」の方法として「古い意味での哲学」と「文学」との間で困っていた日野啓三にとって、「近代文学」の評論、特に荒正人の評論は、その両方を含む表現の方法として、示唆的であった。「いわゆる哲学論文のようではないし、そうかといわゆる小説でもない」なるほどこういう書き方もあるのだ、自己表現の新しい方法がここにある、と感じたのだ。佐々木基「復活としての第二の青春」（『近代文学』復刻版 解説・細目・執筆者索引 前掲）に、つぎのような言説がある。

荒正人の「第二の青春」以下の諸論文には、時代の大きな転換期に特有の、予言者的な、あるいは厳格な論証技きの直観的発想が顕著である。弁証法などというまどろかしい論証を抜きにして、直感的に感知される真理——それは、極限状況における実存主義的な認識と云われるものに近い——を重視するところから、荒正人は戦後の歩みをはじめた。いま思えば、かつてクリスチャンであった荒正人は、そのとき「キリストの復活」を頭に思い描いていたのではないか。

日野啓三が感心し心惹かれた荒正人の「書き方」「自己表現の新しい方法」の魅力とは、佐々木基一の考えに従えば「直感的に感知される真理を重視するところ」にあったのだといえよう。

日野啓三「正常人荒正人」（『文藝』第一八巻第七号、一九七九年八月一日付発行）によれば、日野啓三は「旧制高校の終りから大学のころいつばい、しばしば荒さんのお宅に出入りした」「高校のころは確か一時、荒さんのアシスタントのような形で、お宅への出勤時間も決まっています、給料もちやんともらったと記憶している」という。荒正人は「当時ラスコーリニコフのように貧しかった」日野啓三のために「文学辞典の原稿の下請けや『近代文学』社の事務手伝いなどのアルバイトを世話してくれた」のだという。ここにいう「文学辞典」とは、近代文学社編『現代日本文学辞典』（河出書房、一九五一年七月三十一日付発行）であろう。同書「凡例」には「編集部全体の事務推進は荒正人が担当した」とある。

日野啓三が高等学校三年の時「ゼミナルで小田切秀雄を招んだ」とがあった。その時「小田切秀雄が口をきわめて」「平野謙や荒正人を、「反革命の観念的自我肥大症だと悪口を言っていたのがとても印象に残って」いる。のちの日野啓三「虚点という地点について——荒正人論——」（『文学界』第七巻第一二号、一九五二年二月一日付発行）に、「出発点に固執する人々、到達点のみを絶対とする人々双方の無理解と誤解と敵意の中」に荒正人はいた、という言説があるが、そういう「人々」の一人が小田切秀雄であったのだろう。その時日野啓三は「そうじゃない」と思いながら、反駁できなくて、小田切秀雄の「顔をにらみつけて」いた。その頃「内心クソ」と思いながらじつと黙っていななければいけないことが『近代文学』にはつきりと書いてあった」という。「事務アルバイト」は「二年間ほど」続いたようだ。

大学に進んでから日野啓三は荒正人に、友人山本思外里と生物学者飯島衛とを含めた四人で、毎月一回ずつドストエフスキイの読書会をしてもらった。その会での荒正人の次の言葉は、よく覚えていっているという。「ドストエフスキイと聖書さえ十分に読みこめば、過去、現在、未来のすべてのことがわかります。」「日野啓三「荒正人論」（『新選現代日本文学全集38』（筑摩書房、一九六〇年七月一五日付発行）に依れば、次のように言えるのだろうか。

私は様々の事柄に関する彼の文章に接してきたが、その間、つねに私の心の最も深い部分に独特な手ごたえをもつて受けとめてきたのは、そこに扱われている論題や批判や意見より、むしろその奥にある荒正人という存在そのものの異様な重さであったといえる。

荒正人の「内なる眼」は、「赤外線も紫外線も感光する」「人間の光源の暗い秘密も、人類の究極の目もくらむような相も」見る。彼の文章を読む時「一種啓示めいた手ごたえを受ける」そのものは、彼の「異様な魂の能力」であって、その「能力」を「もし一語で言い表わす」とすれば、「予言的という形容」しかなく「荒野に呼ばれる声」だと、日野啓三はいう。「目のくらむような未来のヴィジョンと希望とを」語りつづけた荒正人は、日野啓三にとって「新しいヒューマニスト」とでもいうしかない存在であったようだ。

「荒正人を偲ぶ」の特集に寄せた日野啓三の「宇宙を飛び続ける一個の星」（「週刊読書人」第一二八八号、一九七九年七月二日付発行）に依れば、日野啓三は、「荒さんが時代と最も激しく交った時期に親しかった」といい、「強烈な個性が時代のリアリティーと真向からぶつかって、白色の閃光を放っていた一時期である。一個の精神と現実との美しくも凄絶な、接触のドラマを、二十歳前後だった私は、目のあたりに見る思いだった」といい、その存在を「強いエネルギーをもつ一個の星」「誇り高く独自の組成の単独の慧星」に譬えている。荒正人という「特異な精神」は、いわゆる「現実」の「こちら側」ではなく、時間を越えた「向う側」の感覚を強く持つて、「人間の精神的靈的変革」のヴィジョンを抱き続けた。「一時期にせよ、時代と激しく交わった者の声は、長く人々の心に残るのだ」と、改めて思い知らされたのであった。

日野啓三が荒正人から学んだのは、様々なものの価値と意味とを、根源的にかつ主体的に問い直す、その内的必然の源泉ということになるうか。以後の日野啓三の文学的営為は、これまでの根源性主体性を、問い

直し掘りさげ深め広げていくことに力が尽くされた、といつてよい。

III 「近代文学」初掲載の評論

——「野間宏論」

日野啓三「近代文学」と私」（前掲）には、大学進学後「ガリ版刷りの同人雑誌をつくり、私は荒さんの影響の濃い評論を書き始めた」とある。また、（昭和五十七年九月、日野啓三記）の年譜「日野啓三」（『芥川賞全集第十巻』文芸春秋、一九八二年一月二十五日付発行）の「昭和二十六年（一九五二）二十二歳」の項に、次のような言説もある。

「二十代」の仲間に神山圭介を加え、ガリ版刷りの同人誌「現代文学」を出す（5号まで）。「ニヒリズム文学の系譜」「現代文学とは何か」などの評論を書く。

荒氏のすすめで「近代文学」に「野間宏論」「エレンブルグ論」ひとつの伝説について」「堀田善衛論」などを書く。

これらの評論（いずれも単行本未収録）とくに「現代文学とは何か」で、新人批評家として認められる。

「とくに「現代文学とは何か」で、新人批評家として認められる」とは、加藤周一「新しい批評家」（『文学界』第五卷第一二号、一九五一年二月一日付発行）で、「来るべき年」に活躍が「期待」される批評家として、彼の「仕事」が第一に紹介されたことを指している。

日野啓三「近代文学」と私」（前掲）には、「大学を卒業する頃に

なつて「近代文学」に評論を掲載してもらえようになつた」とある。日野啓三の「評論」が「近代文学」に初めて「掲載」されたのは、「旧制東大」最終学年の「三年」に「進んでから」であつた。一九五一（昭和二六）年八月一日付発行の第六巻第五号「五十号記念」に「戦後作家論集」三一篇が掲げられていて、「戦後作家論17」として日野啓三の「野間宏論」が掲載されている。先の年譜「日野啓三」（前掲）に、「野間宏論」「エレンブルグ論」「堀田善衛論」など、この年発表した評論は「いずれも単行本未収録」とあつた。以下、この三つの評論を稍詳細に紹介し、日野啓三が文学活動の出発期に、様々なものの価値と意味とを、如何に根源的に問い直し如何に掘り下げ深め広げていったかを、確認しておきたい。

「野間宏論」において日野啓三は「三年前『暗い絵』をはじめ手にしたときの感動を今も忘れることができない」という。「三年前」に日野啓三は、小説集『暗い絵』（真善美社、一九四七年一〇月一〇日付発行）を購入して、「暗い絵」を読んだようである。そこには「醜悪な体臭にまみれた生身の自己」を「常に俺自身の底から、俺自身を破つてくべり出ながら昇つて行く」方向に追求して定着するという、「新たなレアリテ」がみられ、日野啓三は「戦後文学の革新的な未来を約束する強力な胚種」を見た。「顔の中の赤い月」（「総合文化」第一巻第二号、一九四七年八月一日付発行）では「エゴイズムの我執」を、「崩壊感覚」（「世界評論」第三巻第一号〜第三号、一九四八年一月一日〜三月一日付発行）では「ニヒリズムの蒙気」を、「夫々ヒューマニズムへの志向と大胆に対決」させながら、自己の作家的「出発の姿勢を明らかにした」という。「己が醜悪な素顔を恐れることなく凝視」し、その「真実」に

「誠実に徹する以外に道はありえない」という「作者の決意」は、「戦後世代の強い共感を呼び起こした」。「エゴイズムをブルジョア個人主義と言ひ直し、ニヒリズムを末期資本主義に於ける階級的不安の反映だなどと、簡単に割りきつて憚らぬ自称ヒューマニストへの抵抗も、思えばばくらは野間宏の作品から学び」とつた、と日野啓三は述べている。正しく荒正人の「影響の濃い評論」といつてよからう。

ところが「日本の最も深い場所」（「文藝春秋」第一七巻第七号、一九四九年七月一日付発行）で野間宏は、「自分自身を捨てて他を生かす愛」が「成立する根元」となるものは「共産党の細胞である」といい、「細胞に於て人は個人主義に止ることは絶対に不可能である。自己意識からの脱出はこゝに於いて始めて可能となる」という時、「暗い絵」で「レーニズムと皆はいうが、そのレーニズムの何処で如何にして生きるのか」と、「主体の真実を問うたその答えが之であつたのか」と思う。その「手さばき」は、「問題の抛棄であつても解決ではなく」「エゴイズムの消却」ではあつても「ヒューマニズムへの止揚」ではない、と日野啓三は批判する。「青年の環」（「近代文学」第二巻第六号、一九四七年六月一日付発行「華やかな色どり」から「近代文学」その他に断続連載）で「革命的労働者」を描くときの「甘さ」、「脱落者」を書くときの「意地悪い」「視線」。「安易な社会へのよりかゝり」。「暗い絵」。「顔の中の赤い月」で提出した問題を「正しく解決して歩み出す」ためには、「更にきびしい人間凝視と現実対決」の「道」を歩むべきではないか、と問い糾す。日野啓三の「近代文学」誌上での初めての評論の要旨である。

却説、日野啓三が「野間宏論」を書いた年齢と同年齢の頃、私も初め

ての評論「『暗い絵』論」（『青銅』第一五号、一九五五年九月二五日付発行）を発表したことがあった。その末尾に、「暗い絵」の「青年インテリゲンツィア群像」について「おそろしく畸形化した自我、我執を断ち切りえぬ青年群像から、いらだつような感情を味わされた」としながら、「不当に歪曲された」「自我の我執」が「苦悩にみちたもの」であるにせよ「そこにはよく達世代が決定的に喪失しているような人生の一時期としての若さ、青春を感得することかできた」とし、次のように述べている。

（暗い谷間）を体験したといわれる野間達世代にとって戦争は、「城壁にかこまれた自我の城の上に襲いかかる単なる外部の事件ではなくて、外部と同時に内部を犯す事件であった」としても、意識するなんらかの形成がそこにはおこなわれていた。よく達世代には、戦場の異常体験はないにせよ、爆撃の猛火の中で、それを日常的現実として生きた幼年から少年の時代、戦火に焼け爛れた荒廃の現実のなかにおいて少年から青年への生理的過渡期を経験したのである。白紙、まったくのタブラ・ラサのよく達世代の精神、肉体にとつてこそ、それが無意識的であるにせよおそらく決定的に「内部を犯す事件」であったのではないかということだ。（略）よく達は、すくなくともよくは野間達世代に（暗い谷間）——戦争の時代の人間を感じてならない。

続けて「自己の世代的主張をしようと思図するものではない」と断っているが、このたび荒正人「暗い三角形」の「フアシズムと戦争の中で

思い知らされたのは何よりもまず、抹殺し清算した筈の自我がまだ執拗に生きのびていたことだ。これは自己の再発見であった。」という言葉や日野啓三の「野間宏論」を読んで、日野啓三の世代は、野間宏の世代と「よく達」の世代との中間に位置すると、痛切に感じた。「野間宏論」のあと日野啓三は、野間宏の世代がもっていた「自我の我執」を断ち切つて「よく達」の世代に近づき、「タブラ・ラサ」を求めて行くことになる。

IV 新しいイメージの発見

——「イリヤ・エレンブルグ論」

「近代文学」に二番目に掲載された日野啓三の評論は、一九五一（昭和二六）年九月一日付発行の第六卷第六号、通巻五一号の特集「現代外国作家論」欄のうち的一篇として掲載された「イリヤ・エレンブルグ論——ひとつの伝説について——」であった。サブタイトルの「ひとつの伝説」については「イリヤ・エレンブルグ論」の劈頭に次のような言説がある。

よくも亦、嘗つてこういふ伝説を信じたひとりであった——自己変革のさびしい努力の堆積によつて、古い小市民インテリゲンチヤの世界から、プロレタリアートの側に移行する、という。過渡期の文学者の道は之以外にはありえないし、之以外の生き方は自己偽瞞でなければ怠墮である以上、凡て軽蔑せねばならぬ、と思われたのである。

この言説——「自己変革のさびしい努力の堆積」によって「小市民インテリゲンチヤの世界」から「プロレタリアートの側」に「移行」するという「文学者の道」は、先の「野間宏論」の言説——「己が醜悪な顔を恐れることなく凝視」し、その「真実」に「誠実に徹する以外に道はありえない」という「作者の決意」が日野啓三たち「戦後世代の強い共感呼び起こした」という言説を、想起させる。

日野啓三「近代文学」と私（前掲）には次のような言説がある。

その頃ソ連の同伴者作家イリヤ・エレンブルグについて書くようにと頼まれ、大森の佐野洋の家に泊りこんで苦労したことをよく覚えている。佐野洋は私たちの同人誌の小説を書き、私は知識人作家のプロレタリアートの立場への移行という問題を、エレンブルグに託して書くこうとして、どうしてもうまく書けない。明け方近く、掘りごたつによりかかって少しとろとろとした半睡状態の夢うつつに、別の立場に移行などすることはないので、文学という「虚の立場」に徹すればいい、と思いつき、目がさめてから一気に三十枚近く書いた。

ものを書くという行為の魔性を、初めて味った体験だったが、それが「近代文学」にのつた私の初めての評論であり、活字になった初めての作品だったと思う。

「知識人の作家のプロレタリアートの立場への移行という問題を、エレンブルグに託して書くこうとして、どうしてもうまく書けない」その折

の体験については、日野啓三の小説「台風の眼」にも詳しい言説がある。「台風の眼」に依れば、「書けないと断ろうと一日に幾度も考えた」末「締切の前日、小説家志望の同人の自宅に原稿用紙とペンだけを持って逃げ出した」とある。「小説家志望の同人」とは、丸山一郎のちの作家佐野洋で、当時「大田区市野倉町」に家族と共に住んでいた。「佐野洋は私たちの同人誌の小説を書き」とある「小説」とは、「現代文学」第三号（一九五一年一月二〇日付発行）に掲げられた力作『対立』である。日野啓三は「エレンブルグについて」書こうとして「苦労した」という。「台風の眼」には、その「エレンブルグ論」の巧みな解説がある。だが、ここでは文学的出発期の日野啓三の文業を紹介することに主眼があるので、初出の「イリヤ・エレンブルグ論」の言説に即して要旨を紹介しよう。

ぼくが長い間、エレンブルグを理解できなかったのも、思えば当然のことなのであつた。モスクワの工業家の家に生れ、革命後二十年近い西欧の放浪生活、該博な知識と深い教養を身につけた一流のインテリゲンチヤ、そして戦後はスターリン賞の受賞者——こうした経歴ははげしくぼくの興味を引いたが、ひたすら西から東へと虹の橋を追いながら、ジイドの眼でフォイヒトワングァーの後姿を眺めていたぼくの視線とは、エレンブルグの像がついに明らかかな焦点を結び得なかつたのは至極当り前の話であつたのだ。ペシミストを氣取つた素朴な伝説信者に、過渡期の現実を身をもって知つていたが故に、オプティミストの仮面をまとうより仕方がなかつたこのレアリストの絶望が読みとれなかつたという事実は甚だ教訓的な喜劇

であった。

その「筋道を解こう」としたが、「一向に見えて」こない。日野啓三は、疲れ絶望しきって眠り、目が覚めてはつきりとわかる。「西欧的複雑性とソヴェト的単純性——より簡単にインテリゲンチヤ的とプロレタリア的としてもいよう——その一方を捨てて一方に賭ける」とは決して彼は言つてはしないように「人間性への誠実」とジイドの呼んだ前者の純粋性が、そのまま後者の単純さに通ずるとも彼は考えていない。」そう考えて、日野啓三はわかった。「何故、わからなかつたかという」ともわか「ったというのだ。

つまり過渡期を生きるとは「両面観察」をなしうる位置に身をおき、しかもその背理的な位置が示す過渡期の逆説を怖れることなく自らに課すること。

そのような「過渡期に於けるレアリズムの視線」を、エレンブルグは身につけたというのだ。

彼は新しい単純性と亡びゆく複雑性のめまぐるしく錯綜する現実の渦巻きの内部に生ずる真空の空洞に視点を据えて、ひたすら過渡期の異様な「両面」を凝視したのであった。

そう気付くと同時に「言葉とイメージ」が次々と自然に湧いてきた。「真空の地点——それは気圧ゼロに等しい稀薄の極限であることによ

つて逆に最も充実し緊張した場処である。」「颱風の眼」という言葉を新聞に見たとき日野啓三はエレンブルグを思い浮かべた。エレンブルグが「革命、ファシズム、大戦という二十世紀の歴史を渦巻いた嵐の中にあつて生きた地点」は、まさしく「颱風の眼」の連想を「不自然としない」と考え、そのような前提を、日野啓三は「フリオ・フレントとその弟子達」*Необыкновенные приключения Хулио Хуренито* (一九二二)「トラスト D. E.」*Трест Д. Е.* (一九二三)「ジャンヌ・ネイの愛」*Любовь Жанны Ней* (一九二四)「黄昏の巴里」*Москва слезам не верит* (一九三二)「第二の日」*День второй* (一九三三)「息もつかずに」*He переждя дыхания* (一九三五)評論集「戦争」*Война* (一九四二)長篇「嵐」*Буря* (一九四七)など、多くのエレンブルグの作品を通して論証していった。

末尾で日野啓三は、「結局ほとくの言いたかつたことは」と、次のように述べている。「居直るか、移行するか、という二者択一の形でしか問題提起をしない人々は、未だこの過渡期の現実の怖しい素顔をかいまみ」ていない、と。イリヤ・エレンブルグという作家の中に「現代のレアリスト」を見出す日野啓三は、次のように考える。この過渡期の現実の怖ろしい素顔を明視するには、「夢の凡てを殺し去つて」自ら真空と化し、その虚無のうちにあつて醒めている精神が必要である。このような精神のあり様に気付いた時の様子を、日野啓三は「台風の眼」で次のように述べている。

それから翌日の夕方までに、三十枚近い原稿を一気に書く。ものを書く、ということがどういふことか、その力に初めて触れたと思う。歴史の表面、現実の表面、意識の表面の奥にひそんでいる一種魔的

な力。意識がはずたに破綻しかけたとき、おのずから開かれる別空間。

「イリヤ・エレンブルグ論」について、「近代文学」と私」（前掲）には、「近代文学」にのつた私の初めての評論」「活字になった初めての作品だったと思う」とあるが、これは誤りであろう。この評論が、「過渡期を生きる」ための「両面観察」をなしうる位置「真空の地点」を発見したという意味で、さらには「ものを書くという行為」の奥にひそんでいる、「一種魔的な力」に「初めて触れた」という意味で、日野啓三の「その後の思考の出発点となつた重要な評論」であることには、間違いないが。

V 「颱風の眼」という「仮設」

——「堀田善衛論」

「近代文学」に三番目に掲載された日野啓三の評論は、一九五一年一月一日付発行の第六巻第八号、通巻五二号の「現代日本作家論」欄に掲げられた「堀田善衛論（颱風の眼ということ）」であった。「堀田善衛論」とあるが、八頁半に亙る論のうち、初めの五頁余には堀田善衛への言及がない。先の「イリヤ・エレンブルグ論」で発見され、「堀田善衛論」でサブタイトルとされた「颱風の眼ということ」が、重点的に論究されている。当然のことながらそれは「現代の小説における様式の変貌の問題」に通じる。

この評論に到って、日野啓三の思考力、展開力は、格段に進化したと、

強く感じさせられる。「苦勞」の末「イリヤ・エレンブルグ論」を脱稿し、「ものを書くという行為」の「魔的な力」に触れた成果の現れである。劈頭の小学校理科の実験道具「独楽」の話は、巧みである。環状に雑多な色を塗った「独楽」が廻り出すと、色の並びが次第に混り合い溶けあつて、白くなり、無色になる。イメージの提示による巧みな導入であつた。続けて、アーサー・ケストラーの「真昼の暗黒」Sonnenfinsternis（一九四一）の主人公ルバシヨフの「獄中でみた機関車に追いかけられる夢」が、紹介される。全速力で疾走する機関車は、色が消え、やがて形も喪い、純粹な速度だけが残る。逃げてゆく人間も、色も形も影も喪つて、眼に見えぬ速度という抽象が、追いかけて追いかける。この異様な「狂氣的疾走」（真昼の暗黒）が、「現代」なのだ。日野啓三はいう。「現代を自覚した小説」は、このような「抽象それ自体」を「多様な具体」を通して定着しなければならぬ。「古い小説の理想」——「ありのまゝの人間を描く」とか、「性格を造型する」とか、「心理の跡を写す」とかといった風なこれまでの「小説の基準」「理想」は、「無意味な死語」にすぎなくなつた。「現代」のような「物自体と現象の溶け去つた世界」では、「新たな認識の方法」と「定着の技術」が必要とされ、「作家の眼の質」と「世界に対する精神の装置」がきびしく問ひ直される。

そこで日野啓三は、「現代を自覚した小説」すなわち「現代小説」を、「颱風の眼という象徴」をもって「ひとつの仮設」をたてて論究する。「周囲の嵐の激しく荒れる程、内部真空は完全になり、反対に中点の真空化に比例して颱風の威力は増大する」という関係にある。颱風を正確に観測するには、この眼を捉えねばならぬ」と気象学者はいう。これを踏

まえて日野啓三は、自分なりの「認識論の仮設」をたてる。

第一——作家は現代の動乱の中心に視点を装置する。

第二——作家の精神は完全に死滅して、非情冷酷の真空と化する。

「現代という抽象の嵐」を見究める方法は、「このようにして初めて可能」だという「仮設」である。

アンドレ・マルロオを論じ、日野啓三は「彼の精神は死滅して冴えたそれ」ではなく、「真空化」されていなかった、という。「古い空気」「古い信仰」彼の「愛用してやまぬ用語」でいえば、「人間の尊厳」*dignité*「同志愛」*solidarité*「希望」*espoir*といった「亡霊」が、マルロオには生き残っていた。彼の長編「天使との闘い」*La lutte avec l'ange*（一九四三）。この題名の「天使」「ange」とは、「彼の守護天使」である。「人間性という神体まつわる数々の聖語」——その「尊厳」、その「自由」、その「希望」を、彼に囁き約束してくれた「西欧的ヒューマニズムとでも名づくべきあるもの」の謂であった。その「理想」に忠実であろうとする「古い自分自身との闘い」。しかし、「齢五十を過ぎた彼」に、この「捨身の復活」は耐えられなかった。彼の作品は、「西欧二千年の理想の燈明が吹き消される直前」の「最後の」の「ひとゆらぎ」であったという。「魂の中から」古い「理想の燈明」が「完全に消えた」冷酷に冴えた「眸」にこそ「現代の嵐は隈なく写し出される」と日野啓三はいふのだ。

さらに、ヴィルジル・ゲオルギューの「二十五時」*La vingt-cinquième heure*（一九四九）という「題名の着想は天才的である」と日野啓三はいふ。「第二次大戦の渦中から第二次大戦そのものを主題」として生まれたこの小説は、「救われるにも、死ぬにも、生きるにも、手遅れとな

った時間、それが二十五時なのであります」という一節に、題名の意味が示されている。「主格は人間から世界へと移行」し、人間の「意志」の前には「現代世界」の「宿命」だけがある。この書物は「表紙だけを出版すればよかった」のであって、「絶望の歌によつて自らを慰める希望」も「絶望するしかない世界の不当を何物かに訴えようとする希望」も、それら「一切の希望」は「いさぎよく捨て去るべき」である、ときびしく批判する。「死滅しない眼」は「真空内部」での「明視」に耐えることはできない、と日野啓三はいふ。「人間性」とは、「実体でも公理でも」なく、「自らを常に扼殺しうる能力、その死骸の中から甦える意志」「情熱」である。「問題は既に如何に生きるか、ではなく、生きるか否か、だ」と、日野啓三は主張するのである。「動乱を動乱のままに」生きんとする「意志」。「真空の虚無」の内部にあつて、尚醒めている「明視の精神」——これが必要だと考えるのだ。

「眼の虚無」と化することによつて初めて「外側の現実の風を描くことは可能だ」と日野啓三は考え、堀田善衛は逆に「外側の現実の風を描くこと」によつて「眼の虚無」を明らかにしようとする。「同じことである」と、日野啓三はいふ。共にこの「現代を颱風」とみだて、この「現代の自覚」を「颱風の眼という象徴」をもつて語ることによつて、「作家の精神」を「真空」または「虚無」と規定する。日野啓三は、「現代小説は之以外にはありえない」という「仮設」を提出し、堀田善衛の「広場の孤独」（「人間」第六卷第八号、一九五一年八月一日付発行、「中央公論文芸特集」第九号、一九五一年九月二五日付発行）は、「この方法的自覚を核」として創られた「作品」である、といふのだ。

「歯車」（「文学51」第一卷第一号、一九五一年五月一日付発行）

「広場の孤独」などの言説を挙げながら、日野啓三は次のように指摘する。

現代日本という嵐を、外側から傍観していた怠惰な精神と、嵐に捲きこまれて流され続けていた盲目の精神だけしかなかったこの国に今、明視する精神——精神の名に値する精神が結晶しつつあるのである。

堀田善衛は、この「貧しい国のさゝやかな具体」を通して「巨大な抽象」を見極め、「歴史の渦巻き」を、「日々の生活の底に投影してみせる」技術——「現代作家の視線を我がものにしえた」作家だという。さらに、没落オーストリー貴族ティルピッツの口をかりて語られる次の言葉を、「素通りに読みとばしてはならぬ」と日野啓三はいう。

「動乱や革命の、非人間的な結果の中に、なおかつ人間的なものをつくり上げようとする、見方によっては徒らな努力、その努力自体の中にしか現代の希望はない。」

この言葉は「生きるか否か、の極限で、生きる方に賭ける一種非人間的なまでの意志のこと」と日野啓三はいう。「現代の希望」とは、「未来への夢の一切は消え」「可能性の凡ては死に絶えた中」にあつて「歴史の颱風を凝視してたじろがぬ明視の眸」を保ち、「動乱の中心に於いて生きる情熱に衰えをみせぬ」ということであつて、日野啓三「荒正人論」（前掲）の言葉に倣えば、これが「新しいヒューマニスト」日野啓

三の考えの原基といえよう。またこれが、マルロオも、ゲオルギウもついに吹き消しえなかつた「最後の燈明を吹き消した後の世界」、言葉の正確な用法に於ける「二十五時の世界」の率直な自覚である、というのだ。

「野間宏論」に始まり「イリヤ・エレンブルグ論」を経て「堀田善衛論」に到る、日野啓三の評論に一貫している主題はといえば、「政治と文学」ということになる。だが、稿が改められ進められることに、問い直され掘り下げ深められ広げられて、ついに「物自体と現象の境界の溶け去つた世界」「抽象それ自体」と、その「世界」「抽象」を「認識する方法」「定着する技術」との問題になつて、もはや「政治と文学」という次元を超越している気配を帯びている。「過渡期」「後進国」「知識人」というきびしい条件の裡にあつて、日野啓三は、「暗い後進国」日本の「社会的、心理的現表」を離れてはいけない、変革は「足許から」「内側から」「自分の内部から」行わなければならない、と考へていた。そこで日野啓三は、「過渡期」「後進国」「知識人」という条件の「矛盾」に耐え、その「矛盾」を逆に「生きる」という「覚悟」をする「覚悟」が、「非在」を「存在」に化す「創造」の「契機」となると、考へるのだ。このような「立場」が、翌一九五二年に、「虚点」という言葉に結晶するのである。

（やまのうち しょうし）